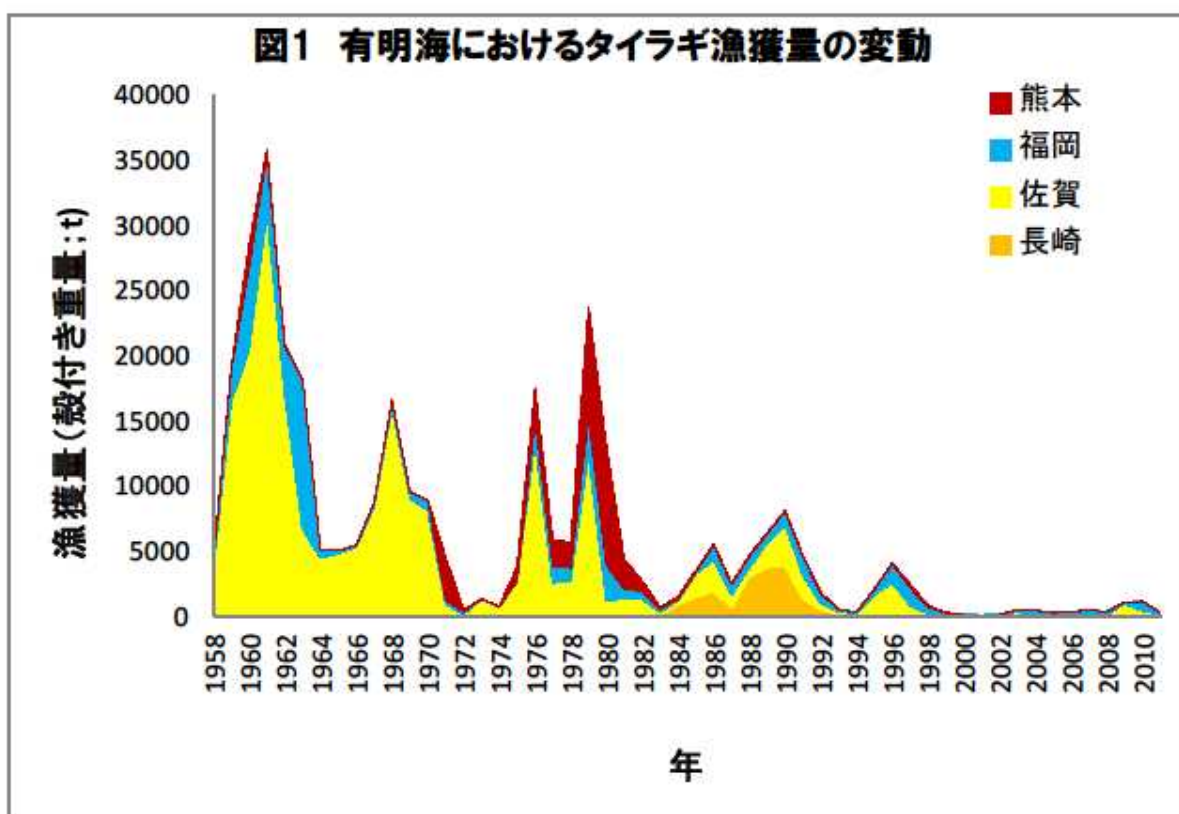


(別添資料)

内湾の砂泥域に生息する大型の二枚貝であるタイラギは、大きな貝柱が食用として重用されている高級食材として知られています。1990年代までの主要な産地であった有明海などで潜水法による漁業が行われてきましたが、近年はほとんど漁獲されなくなり、休漁を余儀なくされるなどの深刻な事態となっています(図1)。有明海以外の産地でも80年代より資源の水準の低い状況が続いており、2000年以降壊滅的な状況が続いています。タイラギの資源量が減少した要因の解明と、その対策に関する調査研究が行われてきましたが、未だ有効な対策は見つかっていません。そのため、天然資源に依存しない養殖技術への期待が高まり、水産総合研究センターでは、タイラギの垂下式養殖技術の開発を進め、養殖筏から垂下して飼育することでタイラギは良好に成長することを明らかにしました。しかし、養殖技術の実用化に向けて、稚貝を安定的に供給するための技術開発が最大の課題となっていました。



水産総合研究センターでは、瀬戸内海区水産研究所の海産無脊椎動物研究センターにおいて、平成23年度からタイラギの人工種苗生産に取り組みました。昨年7月に産卵した親貝から多数の浮遊幼生が得られ、2ヶ月近くの浮遊生活期を経て、約7万個体が着底・変態し、初期稚貝になりました。この生産個数は、過去の事例(平成9年 民間企業 40個, 平成18年 長崎県 1500個)を大きく上回り、タイラギの種苗生産技術が新たな段階に達したことを示しています。海産無脊椎動物研究センターでは、このとき得られたタイラギ稚貝の飼育を継続しており、個体数は2.5万個体まで減少したものの、殻長は10~20mmまで成長しています。

今回の成功の背景としては、産卵前の親貝を十分に成熟させることができたこと、浮遊幼生の生残率を高める工夫をしたことが重要であると考えていますが、この技術を実用化し普及させるには、成功要因をさらに具体的に特定し、再現性を確認することが不可欠です。このため、平成26年度以

降も引き続き、関係機関と連携を図りながら、タイラギの種苗生産技術の実用化に取り組む予定です。



タイラギの親貝（殻長 22cm）



タイラギの稚貝（日齢 95、平均殻長 9.5mm）